

## 『本朝文粹』卷第十三の研究

— 表白文一篇・願文二篇の注釈 —

磯部 祥子

小林 真由美

山田 尚子

『本朝文粹』卷第十三所収の表白文一篇・願文二篇について、身延山久遠寺蔵本『本朝文粹』の本文及び訓点にもとづいて翻刻・校訂本文・訓読文を作成し、現代語訳と語釈を付した。

『本朝文粹』（十四卷）は平安期の名文を文体ごとに類聚した文集である。収録される漢詩文は弘仁年間（八一〇～八二二）から長元三年（一一三〇）までの四三二首。編者は藤原明衡、康平年間（一一五六～一〇六五）に編纂したと考えられている。文章作成の典範として後世に多大な影響を与えた。身延山本『本朝文粹』は、巻第一を欠く十三巻の卷子本で

ある。各巻末の奥書から、文永年間（一二六四～一二七五）書写の清原教隆加點本（散逸）を親本とすることが知られる。この清原教隆加點本を文永六～八年（一二六九～一二七一）に書写し、その写本を建治二年（一二七六）年に書写したのが身延山本である（卷第十三奥書）。

清原教隆は明経博士清原家の分家仲隆の第三子。建長二年（一二五〇）に鎌倉幕府に招かれて將軍頼嗣、宗尊親王の侍講となった。金沢文庫創設者である北條実時も厚く教隆に師事したために、金沢文庫に数多くの博士家証本を伝えることになった。

身延山本は清原教隆加本系統の最古の善本である。さら  
に言えば、身延山本よりも古い現存写本はすべて一巻か二巻  
の零本であるため、ほぼ完具の写本としても最古である。身  
延山本の転写本はかなり普及し、流布本すべての祖本である  
ことが認められている。

身延山本はほぼ三手の寄合書で、本文と同筆のヲコト点・  
句点・返点・音訓合符・四声点・送り仮名等が付され、行間  
や欄外に異訓や注が書き入れられている。誤写や後の書き入  
れと思われる箇所はあるが、全編にわたって鎌倉幕府第一の  
碩学・教隆による訓点を伝えている。その漢文訓読を学ぶこ  
とを第一の目的として、校注者三名は成城大学文芸学部研究  
助成を受けて共同研究「身延山本『本朝文粹』卷第十三の研  
究」(平成二十八・二十九年度)を行った。

共同研究の対象とした卷十三は祭文・祝願文・表白・発  
願・知識文・廻文・願文を収録しており、社寺の法会に臨ん  
で作成された文章類である。平安前期の仏教と文芸との関わ  
り合いを示す資料としても注目される。社寺ではこの卷第十  
三を模範文例集として使用することが多かつたらしく、卷第  
十三の現存率が高い。

『本朝文粹』の近現代における主な注釈書は次の四書であ

る。全注釈はおよそ百年前の柿村重松『本朝文粹註釈』のみ  
である。

柿村重松『本朝文粹註釈』(大正十一年、富山房)

小島憲之校注『日本古典文学大系69 懐風藻・文華秀麗

集・本朝文粹』(昭和三十九年、岩波書店)

大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『新日本古典文学大

系27 本朝文粹』(平成四年、岩波書店)

後藤昭雄『本朝文粹抄』〜『本朝文粹抄 五』(平成十

八〜三十年、勉誠社)

担当は以下の通りである。( ) 内の数字は『新日本古典  
文学大系』の作品番号である。

一、天皇御筆法華経供養講説日問者表白(395)(磯部祥子)

二、朱雀院被修御八講願文(406)(小林真由美)

三、為仁康上人修五時講願文(410)(山田尚子)

## 凡例

## 【身延山本翻刻】

・『身延山久遠寺藏重要文化財本朝文粹』（昭和五十五年、汲古書院）の影印を使用した。

・漢字は原則として通行の字体にあらためた。

・本文の異文や書き入れは【】で示した。

・ヲコト点・四声点・句点・音訓合符・傍訓・異訓等は翻刻しない。

・虫損などで欠けている文字は□で示した。

・行頭に、表題を〇として、身延山本の各作品における行数をしめした。

## 【校異】

・校異に用いた諸本は左に挙げた通りで（ ）内の略称を用いた。猿投神社本の数字は『豊田市史研究特別号 猿投神社の典籍』（平成三十年、新修豊田市史編さん専門委員会）の各作品の個別解説の番号である。

・校異に使用した諸本は作品ごとに【校異】の初めに示し

た。

・行頭の数字は【身延山本翻刻】の行数である。

・判読できない文字や虫損などで欠けている文字は□で示した。

（梅）東京国立博物館梅沢記念館旧蔵本（正安元年（一二九九）写）

（猿17）猿投神社所蔵本（鎌倉時代写）

（猿18）猿投神社所蔵本（鎌倉時代写）

（猿19）猿投神社所蔵本（鎌倉時代写）

（天）天理図書館所蔵館本（猿投神社本18の僚卷、鎌倉

時代写）

（剛）天野山金剛寺所蔵本（鎌倉時代写）

（内）内閣文庫本（林羅山旧蔵、近世初期写）

（内イ）内閣文庫異本

（古）寛永六年（一六二九）刊古活字版

（板）正保五年（一六四八）跋板本

（校）田中参校訂『本朝文粹』本

（永）田中参校訂本所引永享（一四二九）一四四二本

（柿）柿村重松『本朝文粹註釈』

(中) 土井洋一・中尾真樹『本朝文粹の研究』校本編

所引中山法華経寺本(永仁年間(一二九三〜一

二九九)写)

(陽) 同所引陽明文庫所藏本(江戸時代写)

(河) 同所引長谷寺能満院所藏大河内本(鎌倉時代写)

【校訂本文】

- ・身延山本を底本として作成した。
- ・漢字は、原則として通行の字体にあらためた。
- ・校訂した箇所は□で囲んで示した。
- ・句読点は校注者が附した。

【訓読】

- ・校訂本文を身延山本の訓点にもとづいて作成した。ただし身延山本の訓点を改めた箇所もある。
- ・各段落の後に( )内に示した段数は校注者による。

【現代語訳】

- ・【訓読】に示した段数ごとに掲載した。

【語釈】

- ・【訓読】に示した段数ごとに掲載した。
- ・【校訂本文】記載の語句を掲出語句とした。

## 一、天皇御筆法華經供養講説日問者表白 (395)

## 【身延本翻刻】

- 0 天皇御筆法華經供養講説日問者表白 前中書王
- 1 金輪聖主堯雲遍燾潤菓草於春畝舜
- 2 日重照転法輪於昏衢方今開蓮之文
- 3 出聖跡【臨】池之妙貫花之偈生神筆入木
- 4 之功爰擇碩德於雁堂開講筵於燕寢
- 5 誠是所未曾聽不可得逢者歎講匠先
- 6 当其仁始説其義東風未温舌下之氷
- 7 盡解子夜未至胸中之月先明抑聊
- 8 叩疑関之樞將披難入之義
- 9 天曆九年正月四日

## 【翻刻注】

- 4 「【臨】池」は臨が右傍書入。

## 【校異】

猿投神社⑰本(猿⑰)、同⑱本(猿⑱)、天野山金剛寺本

(剛)、内閣文庫本(内)、内閣文庫異本(内イ)、寛永六年刊古活字版(古)、正保五年跋板本(板)、田中參校訂本(校)、田中參校訂本所引永享本(永)、柿村重松『本朝文粹註釈』(柿)、『本朝文粹の研究 校本篇』所引中山法華經寺藏本(中)、『本朝文粹の研究 校本篇』所引大河内本(河)

- 0 天皇―(永)天皇右傍有「村上」、(猿⑰・剛)「村上天皇」法華經―(猿⑰・猿⑱)「法花經」
  - 1 表白―(猿⑰・剛)「表白文」
  - 1 金輪―(猿⑰)「一行前に「金」見せ消ちカ」
  - 主―(内)傍書「堂マイ」
  - 3 (臨)池―(猿⑰・猿⑱・剛・内・古・板・校・柿)「臨池」
  - 之偈―(猿⑱)傍書「之偈」
  - 4 堂―(内)傍書「塔」
  - 5 誠―(河)ナシ
  - 歎―(猿⑰・猿⑱・剛・古・板・校・柿・中)「也」
  - 6 其―(柿)「彼」
  - 7 抑聊―(板・校・柿)「聊」、(永)ナシ
- \*金剛寺本では、5「誠是」「匠先」と6「温舌」7

「之月」は破損のための欠字とみられる。一丁の裏表に当たる。

【校訂本文】（□内は校訂箇所）

天皇御筆法華經供養講説日問者表白 前中書王

金輪聖主堯雲遍燾潤草於春畝舜日重照轉法輪於昏衢。方今、開蓮之文、出聖跡、**臨**池之妙貫花之偈、生神筆入木之功。爰、擇碩德於雁堂、開講筵於燕寢。誠是、所未曾聽、不可得逢者歟。講匠、先当其仁始說其義。東風未温、舌下之氷盡解、子夜未至、胸中之月先明。**聊**、叩疑闕之樞將披難入之義。

天曆九年正月四日

【訓読】

村上天皇御筆法華經供養の講説の日、問者の表白

前中書王

金輪聖主、堯雲遍く燾ひて葉草を春の畝に潤し、舜日重ね照して法輪を昏衢に転ず。方に今、開蓮の文、聖跡臨池の妙に出で、貫花の偈、神筆の入木の功に生れり。爰に、碩德を雁堂に擇んで、講筵を燕寢に開くと。誠に是、未だ曾て聴せらるる所、逢ふを得べからざるものかと。講匠、先づ其の仁に

当たりて、始て其の義を説く。東風未だ温かならざるに、舌下の氷り盡く解け、子夜未だ至らざるに、胸の中の月先づ明なり。聊か、疑闕の樞に叩いて、將に難入の義を披かんとす。

天曆九年正月四日

【解説】

本表白は、天曆九年（九五五）正月四日、前年に亡くなつた母太皇太后穩子の一周忌法要のために村上天皇が法華經を供養し法会を行つた際の表白文である。

村上天皇（九二六〜九六七）は、第六十二代天皇（在位九四六〜九六七）。醍醐天皇第十四皇子。名は成明。天慶七年（九四四）に朱雀天皇の皇太弟となり同九年（九四六）に即位。関白藤原忠平の死後は摂関を置かず、天皇親政を目指し、後に「天曆の治」と称された。日記『村上天皇御記』は十世紀の天皇政務儀式を知る上で重要な史料といわれている。

『扶桑略記』第二十五、天曆九年乙卯正月四日条には、「皇帝奉為母儀故大皇太后。供養御筆法華經。」とあつてこの日の法会の記述が見え、参議大江維時による願文や小倉親王（兼明親王）による本表白が所載されている。前年天曆八年正月四日に崩御した母后穩子の一周忌法会のために村上天皇

が自筆の法華経を供養し、弘徽殿にて法華経八講が催行されたことが記されている。『朝野群載』巻第二、「文筆中」にも「天皇法華経講問者表白」として本表白が載る。

前中書王は兼明親王（九一四―九八七）。平安中期の政治家・文人。醍醐天皇の第十六皇子。朱雀天皇・村上天皇・源高明の異母兄弟にあたる。一時臣籍降下して源兼明と名乗ったが、晩年皇籍に復帰し、中務卿となったことから中書王、また小倉親王とも呼ばれる。詩文・書に長じ、『本朝文粹』「和漢朗詠集」に作品が残る。

「表白」とは法会や修法を行うときにその趣旨を本尊、僧、大衆に告げるためその初めに読み上げられるもので、「啓白」とも「開白」とも言う。法会などの趣旨や所願などを述べる華やかな美文であり、対句本位の駢儷体の形をとる。神仏に祈願内容を伝える願文を兼ねる場合もある。本来は導師や施主の立場からの文章であるが、儒者が代作する場合もあり、ここでも村上天皇の異母兄弟にあたる兼明親王（前中書王）が作成している。初めに、仏法と村上天皇の徳を讃嘆し、次に法会の作法を示して導師を敬仰し、最後に行者である参会者の意思や祈願を述べて法華経への帰依を表す。文章は儒教思想に基づく文芸の詩句と仏教の経文を包摂している。表

白の早い作例としては空海による『性霊集』所収のものが知られているが、「表白」という表題を確実に有するものとしては、本表白が最古の作品とされる（山本真吾『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』汲古書院、平成十八年一月）。

#### 【現代語訳】

金輪王である村上天皇は、雲が遍く民草を覆うように庶民に徳を施し、日が照らすように仏の教えを迷いに満ちた世間に教化なさる。まさに今や、法華経の経文は天皇の靈妙な筆によって書かれ、その尊い偈も写し出された。そこで徳の高い僧侶を仏堂から選び出して、殿上にて講座を開かれた。誠にこれは、未だかつて聞いたことがなく、出会ったことさえない。講師もまず尊い人を得て、初めてその尊い教義を説くことができる。東から吹く春の風はまだ温かくはないが、講師の説くところによって、言葉の疑念は氷が溶けるようになり、き明かされ、夜はまだ夜半に至らないのに、胸中の月が明るく輝くように聞く者の心は明晰となる。この機会にわずかではあるが、扉を叩いて門の蝶番を回して入りたい門に入るように、自らの疑問について問い、仏の深淵で理解したい

教義を今にも知ろうとするのである。

天曆九年正月四日

【語釈】

○金輪 転輪聖王（金輪・銀輪・銅輪・鉄輪の四王）のうち、最上の金輪宝を有して、世界を統治する転輪王を金輪王と称し、ここでは、村上天皇を示す。次頁の江納言（大江維時）「朱雀院被修御八講願文」（『本朝文粹』第十三卷、天慶十年、九四七）にも「金輪常照」として村上天皇を称揚している。

○聖主 徳を備えた天皇。ここでは村上天皇。

○堯雲 堯の行った徳政を雲にたとえている。

○葉草 『法華経』には、この世界のあらゆる雑草や樹木の類は大きな雲から降り注いだ雨からそれぞれの力に応じて成長し花を咲かせ実を実らせるように、完全な悟りに達した如來は、この世に出現して全てを一樣に潤すとある。

「譬如三千大千世界。山川谿谷土地。所生草木叢林。及諸葉草。種類若干。名色各異。密雲彌布。遍覆三千大千世界。」（中略）一雲所<sub>レ</sub>雨。称<sub>二</sub>其種性<sub>一</sub>。而得<sub>二</sub>成長<sub>一</sub>。華果敷実。雖<sub>二</sub>一地所<sub>レ</sub>生。一雨所<sub>レ</sub>潤。而諸草木。各有<sub>中</sub>

差別<sub>上</sub>。迦葉当知。如來亦復如是。」（『法華経』卷第三、葉草喻品）ここでは、直前の「堯雲」とある堯の徳政と如來の功徳を響き合わせている。

○舜日 舜の行った徳政を太陽にたとえている。

○法輪 仏教の教義についての議論。宗論。『法華経』には、多くの求法者達は、すべて悟りを達成しようと修行して後戻りすることなく、この一生だけをこの世で送って二度と再び生死の回転（輪廻）に陥ることなく、またこの上なく完全な悟りを達成するための確固たる地盤を獲得しており、教への車輪（法輪）をくじけることなく回し続けたとある。

「皆得<sub>二</sub>陀羅尼<sub>一</sub>。樂説弁才。転<sub>二</sub>不退転法輪<sub>一</sub>。」（『法華経』卷第一、序品）仏の教えや仏が教えを説くことを「転法輪」と言い、釈尊の説いた法が威光をもつて人から人へと遙かに広まることを喩えている。転輪聖王が神秘的な「輪」の威光で全世界を統一するという神話もこの法輪の概念と相まって仏典の中で発展した。ここでは村上天皇の徳を称揚し仏法の広まる様子をいう。

○昏衢 暗く迷いにみちた世間。

○開蓮之文 法華経のこと。

○貫花之偈 經典中の美しい偈頌をいう。

○臨池 中国後漢の張芝が池に臨んで書を学んだという故事  
 「張芝臨池学書、池水尽黒。」王羲之「与人書」から習字  
 や書道のことをいう。

○入木 王羲之が書いたものは墨が木に十分の三の深さまで  
 浸み込んだという故事から、書跡・墨跡をいう。

○碩徳 大きな徳。大きな徳のある人。高い徳のある僧侶。

○雁堂 仏堂。

○燕寝 天子がくつろぎ休息する御殿。

○舌下之氷盡解 学問や言葉などの不明が明らかにすること  
 を氷にたとえる。

○子夜 午前零時。夜半。

○樞 かなめ。扉の蝶番のような上下にある突出部。物事の  
 中心部分や重要な部分。扉。

○難入之義 法華経の経義。『法華経』には、仏の智恵は深淵  
 で見極めがたく、仏の智恵は理解しがたく入門し難いとあ  
 る。「諸仏智恵。甚深無量。其智恵門。難解難入。一切  
 声聞辟支仏。所不能知。」（法華経）巻第二、方便品  
 ○天曆九年 九五五年。兼明はこの時、権中納言。

(磯部 祥子)

## 二、朱雀院被修御八講願文 (406)

【身延山本翻刻】

雑修善

0 朱雀院被修御八講願文

江納言

1 風聞仏心湛水智恵之海無涯神変放光暗

2 冥之霧尺散花雨四種弥勒【觀變】欲決疑於当今

3 材明六通文殊能弁瑞於往昔寔知釈迦

4 尊之説法華経也醍醐味灑豈求雪山

5 之中梅檀風吹自出雲台之下無二無三

6 之車脂轄運載為宗難解難入之門排

7 扇開悟不測是故聽聞受持者書写供養

8 者保宝珠於醉後照燃灯於暗中彼岸

9 引接之因普濟三千界之塵数他方妙覺

10 之果速証四八相之金容抑朝露易滅春

11 夢非長刹那之榮花更变枯木須臾之

12 歛樂還為苦縁况復紅桃漸淺可動風

13 前之心翠柳不濃何貽霜後之悔月宮

14 留影雖得承天之名塵翳寄身恐滞成仏

- 15 之道加以流転三有之群類欲拔罪根往返  
 16 六趣之衆生思授覺慧何謀能救憑白  
 17 毫之照見何善能通仰白牛之引道因  
 18 茲或於天台山或於法性寺多造尊像數  
 19 写經王白業年深丹心日積然而大光廻映  
 20 猶有伏不見之人一乘轉輪非無退亦佳之  
 21 輩重為仏法興隆自他利益奉造立金色  
 22 釈迦如来像一体奉書写金字妙法蓮華  
 23 經一部千花開尽之候百鳥和鳴之時八  
 24 講展筵四日設会鷲子〔舍利弗也〕無双之智振英  
 25 声於暮春之風鶴〔弥勒也〕勤有一之才伝義宝  
 26 於長秋之聽其所修者朱雀院之中柏梁  
 27 殿之上優曇花発海岸香薰嗟呼切利  
 28 天宮之園含歡喜之号蓮華世界之鳥囀  
 29 妙法之音懷古感今異処同趣以此勝利  
 30 遍擬廻施天神地祇增威光以随喜寃靈  
 31 邪鬼銷怨氣以帰真紫微聖德之居金輪  
 32 常照玄圃仙遊之際玉体永明在藩諸王  
 33 不攻盤石之固空桑賢輔久保金鉉之名  
 34 文官武官共励吹塵横草之忠節畿内

- 35 畿外皆報千門万戸之歡娛乃至自有頂  
 36 天及阿鼻地如此経説済度不遺敬白  
 37 天慶十年三月十七日
- 【翻刻注】  
 2 【勸敷】は右傍書入  
 24 【舍利弗也】は左傍書入  
 25 【弥勒也】は左傍書入
- 【校異】  
 東京国立博物館梅沢記念館旧蔵本（梅）、天野山金剛寺本  
 （剛）、天理図書館蔵本（天）、内閣文庫本（内）、寛永六年刊  
 古活字版（古）、正保五年跋板本（板）、田中參校訂本（校）、  
 田中參校訂本所引永享本（永）、柿村重松『本朝文粹註釈』  
 （柿）、『本朝文粹の研究』校本編所引中山法華経寺本（中）、  
 同所引陽明文庫本（陽）
- 0 朱―（天）「於朱」  
 御―（梅・天・陽）ナシ
- 1 風―（柿）「夙」

- 2 花―(陽)「華」
- 3 勒―(梅)「勤」左傍に「勒イ」、(中)□  
 釈―(天)「尺」
- 4 迦―(梅)左傍に「イ無」、(金・天・中・陽)ナシ  
 華―(天・中)「花」
- 5 醜―(天)「題」上部欄外に「醜」、(中)□  
 灑―(梅)「濃」左傍に「灑イ」
- 6 吹―(陽)「馥」
- 7 載―(梅)「戴」
- 8 扇―(陽)「扉」
- 9 接―(梅・天・板・校)「撰」、(柿)「撰文水本作接」、(中)□  
 他―(古・板・校・柿)「陀」
- 10 夢―(梅)「暮夢イ」
- 11 有―(梅)「界」右傍に「有イ」
- 12 返―(天)「還」、(梅)「反」
- 13 (中)□
- 14 道―(梅・剛・天・永・中・陽)「導」、(柿)「導文水本作」  
道今訂之
- 15 日―(剛)「自」
- 16 廻―(剛)「遍」左傍に「廻」
- 17 伏―(中)□  
 不―(天)「而不」
- 18 軛輪―(金・天・中・陽)「輪軛」  
 之―(天)「矣之」
- 19 仏―(梅)ナシ、右傍に「入仏」、(中)□  
 利益―(中)安樂
- 20 立―(梅・剛・天・中・陽)ナシ
- 21 像―(天)ナシ
- 22 写―(梅・剛・中・陽)ナシ
- 23 字―(天)「色」見せ消ちで右傍に「字」  
 妙法蓮華經一部―(梅)「法花開結經」右傍に「イ妙法  
 □□□□」イ下六字はイに無」、(剛)「妙法法」、(天)「妙  
 法云々」、(校)「沙法蓮花華一部」、(中)「妙法」、(陽)  
 「法花開結經一部」
- 24 鶯子―(内)左傍に「舍利弗也」
- 25 鶴勤―(梅・剛・天・中・陽)「鶴勤」、(内)左傍に  
 「弥勒也」、(柿)「鶴勤」注「原作勤亦誤」
- 26 宝―(梅・剛・天・中・陽)「実」
- 27 修―(梅)ナシ、右傍に「修スル」

27 花—(中・陽) 華

嗟呼切—(梅)「呼嗟切」、(金)「呼嗟切」

28 号—(梅)「萼ハナフサ」

華—(天)「花」

30 施—(校)欄上「愠邨云施疑旋」

29 音—(陽) 声

31 銷—(中) 消

怨氣—(天)「氣毒」右傍に「怨氣」

金輪—36敬白—(陽) ナシ

33 攻—(梅・剛・天・内・古・板・校・永・柿・中・陽)

「改」

盤—(梅・天・永・中)「磐」、(柿)「磐流布本作盤、今據水享」

本改之」

34 忠—(剛)「中」右傍に「忠」

畿—(剛)「機」

35 畿—(剛)「機」

【校訂本文】(□内は校訂箇所)

雜修善

朱雀院被修御八講願文

江 納 言

風聞、仏心湛水、智恵之海無涯。神變放光、暗冥之霧尽散。花雨四種。弥<sup>勸</sup>欲決疑於当今。材明六通、文殊能弁瑞於往昔。寔知、釈迦尊之說法華經也。醍醐味灑、豈求雪山之中。梅檀風吹、自出雲台之下。無二無三之車、脂轄運載為宗、難

解難入之門、排扇開悟不測。是故、聽聞受持者、書写供養者、保宝珠於醉後。照燃灯於暗中。彼岸引接之因、普濟三千界之塵数、他方妙覺之果、速証四八相之金容。

抑、朝露易滅、春夢非長。刹那之榮花、更變枯木、須臾之歡樂、還為苦緣。況復、紅桃漸淺、可動風前之心。翠柳不濃、何貽霜後之悔。月宮留影、雖得承天之名、塵翳寄身。恐滯成仏之道。加以、流転三有之群類、欲拔罪根。往返六趣之衆生、思授覺蕊。何謀能救。憑白毫之照見。何善能通。仰白牛之引<sup>導</sup>。

因茲、或於天台山、或於法性寺、多造尊像、数写經王。白業年深、丹心日積。然而大光廻映、猶有伏不見之人。一乘転輪、非無退亦佳之輩。重為仏法興隆、自他利益、奉造立金色釈迦如来像一体。奉書写金字妙法蓮華經一部。千花開尽之候、百鳥和鳴之時、八講展筵、四日設会。鶯子無双之智。振英声於暮春之風、鶴<sup>勸</sup>有一之才。伝義宝於長秋之聽。其所修者、

朱雀院之中、柏梁殿之上、優曇花發、海岸香薫。

嗟呼、忉利天宮之園、含歡喜之号、蓮華世界之鳥、轉妙法之音。懷古感今、異処同趣。以此勝利、遍擬廻施。天神地祇、增威光以隨喜、冤靈邪鬼、銷怨氣以熯真。紫微聖德之居、金輪常照、玄圃仙遊之際、玉体永明。在藩諸王、不改磐石之固。空桑賢輔、久保金鉉之名。文官武官、共勵吹塵橫草之忠節、畿内畿外、皆報千門万户之歡娛。乃至自有頂天、及阿鼻地、如此經說、濟度不遺。敬白。

天慶十年三月十七日

### 【訓読】

雑修善

朱雀院の御八講を修せらるる願文

江納言

風に聞く、仏心水を湛ふ、智恵の海涯無し。神變光を放つ。暗冥の霧尽くに散ず。花四種に雨ふらす。弥勒疑ひを當今に決せんと欲ふ。材六通に明らかなり、文殊能く瑞を往昔に弁う。寔に知りぬ、釈迦尊の法華經を説いたまうことなり。醍醐の味ひ瀧ぐ、豈に雪山の中に求めんや。梅檀風吹く、自ら雲台の下に出づ。無二無三の車、轉に脂さいて、運載する

を宗と爲し、難解難入の門、扇を排て、開悟測らず。是の故に、聴聞受持の者、書写供養の者に、宝珠を酔ひの後に保ち、燃灯を暗の中に照らす。彼岸引接の因、普く三千界の塵数を濟ひ、他方妙覺の果、速かに四八相の金容を証す。(第一段)

抑、朝露滅え易く、春の夢長きにあらず。刹那の栄花、更に枯木に變じ、須臾の歡樂、還りて苦縁たり。況や復た、紅桃漸く浅し、風の前の心を動かすべし。翠柳濃かならず、何ぞ霜の後の悔を貽さん。月宮影を留む、天に承くる名を得たりと雖も、塵翳に身を寄す。恐るらくは成仏の道に滞らんとを。加以、流転三有の群類、罪根を抜かれむと欲ふ。往返六趣の衆生、覺慧を授けんことを思ふ。何の謀か能く救はん。白毫の照見を憑む。何の善か能く通ぜん。白牛の引導を仰ぐ。(第二段)

茲に因て、或は天台山にし、或は法性寺にして、多く尊像を造り、数經王を写す。白業年深く、丹心日積れり。然れども、大光映を廻らす、猶伏不見の人有り。一乘輪を転ず、退亦佳の輩無きにあらず。重ねて仏法興隆、自他利益の為に、金色の釈迦如来像一体を造立し奉つる。金字の妙法蓮華經一部を書写し奉つる。千花開け尽るの候、百鳥和らぎ鳴く時、八講筵を展べ、四日会を設く。鶯子無双の智、英声を暮春の

風に振ひ、鶴勒有一の才、義宝を長秋の聴に伝ふ。其の修する所は、朱雀院の中、柏梁殿の上。優曇花<sup>ひら</sup>発け、海岸香薫す。

(第三段)

嗟呼<sup>あ</sup>、切利天宮の園、歡喜の号を含み、蓮華世界の鳥、妙法の音を囀<sup>なづ</sup>る。古を懐<sup>む</sup>ひ今を感ずるに、処異にして、趣を同じうす。此の勝利を以て、遍く廻施せんと擬す。天神地祇、威光を増し以て随喜し、冤靈邪鬼、怨気を銷<sup>け</sup>し以て真に帰せよ。紫微聖徳の居、金輪常に照し、玄圃仙遊の際には、玉体永く明かならん。在藩諸王、磐石の固めを改めず。空桑賢輔、久しく金鉉の名を保たん。文官武官、共に吹塵横草の忠節を励み、畿内畿外、皆千門万户の歡娛を報ぜん。乃至、有頂天より、阿鼻地に及ぶまで、此の経説の如く、濟度遺さじ。敬白。(第四段)

天慶十年三月十七日

【解説】

天慶十年(九四七)三月十七日に朱雀院柏梁殿で修された法華八講の願文。江納言は大江惟時(八八八〜九六三)。願主は太皇太后(朱雀天皇・村上天皇の母、藤原穩子)。願文は願主・太皇太后の立場で叙述されている。

朱雀院は、嵯峨天皇が創建した右京の朱雀大路に東面する邸宅で、後院として用いられていた。朱雀天皇(第六十一代天皇、在位九三〇〜九四六年)は天慶九年四月二十日、皇太子成明親王(村上天皇)に譲位し、七月十日、母の大皇太后とともに朱雀院に遷り住んだ(『日本紀略』後篇二、朱雀天皇)。敷地は寢殿と柏梁殿に分かれており、柏梁殿は太皇太后の御所として使用していた。天曆四年(九五〇)、朱雀院は火災で焼失し、その後再建されたが後院として使われることはなくなった。

天曆元年(天慶十年)三月十五日、村上天皇が朱雀院に幸し、十六日に太皇太后が朱雀院柏梁殿で法華八講を始め、十九日に終えた(『日本紀略』後篇三、村上天皇)。

願文は四段に分かれており、一段は、『法華経』の賛嘆。

「神変放光」から「説法華経也」まで「法華経」序品をふまえ、釈迦尊が『法華経』を説法する前兆としてあらわれた瑞相について説いている。二段は、今回太皇太后が釈迦如来像を造り金字法華経を写し、法華八講を開いた理由を述べている。三段は、これまで太皇太后が行ってきた写経などの修善に、今回の造仏・写経・法華八講を重ねると説明している。四段は、造仏・写経・法華八講の利益を、天皇・太政天皇は

じめ一切衆生に回向することを祈願している。

## 第一段

### 【現代語訳】

ほのかに聞く。仏の智慧は水を湛<sup>た</sup>えりる大海のように限りなく広大である。かつて釈迦牟尼仏が靈鷲山で法華經の説法の前の三昧（瞑想）に入られたとき、神変が起こった。仏の額の白毫が光を放って暗闇の霧はことごとく散り、四種の天の花が雨のように降りそそいだ。弥勒菩薩はこの瑞相がいったい何のためであるのか疑念を晴らしたいと思った。すると神通力をそなえた文殊菩薩は、過去の諸仏の瑞相の例を引いて明らかにした。これはまさに、釈迦牟尼仏がこれから法華經を説法なさるという前兆なのだ。

仏の説法によって、醍醐の味わいの雨が降り注ぐ。雪山に醍醐を求めるまでもない。梅檀の香りの風が吹きわたる。今ここは梅檀の雲のもとなのである、須弥山の南岸に行くまでもない。無<sup>二</sup>無<sup>三</sup>の法である一乗の大白牛車は、轉に脂をさして衆生を載せて運ぶ。難解難入の門は錠を外して開き、覺りに導かれる衆生は測り知れない。

そうであるので、この經を聴聞し受持する者、書写し供養する者は、たとえ人が酒に酔っているうちに知らずに宝珠を持たされるように、無知の暗闇を灯火で照らすことになる。悟りの彼岸に導く功德はあまねく三千界の衆生を済<sup>す</sup>く、淨土の覺りの果報はすみやかに仏の三十二相の金容をあらわす。

### 【語釈】

○神変放光 靈鷲山で会衆に囲まれた釈迦牟尼仏が三昧に入ると、『法華經』の説法の瑞兆としてさまざまな神変が起こったという。「爾時仏、放<sup>三</sup>眉間白毫相光<sup>一</sup>、照<sup>二</sup>東方、万八千世界<sup>一</sup>（中略）爾時弥勒菩薩、作<sup>二</sup>是念<sup>一</sup>、今者世尊、現<sup>二</sup>神變相<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>何因緣<sup>一</sup>、而有<sup>二</sup>此瑞<sup>一</sup>」（『法華經』卷第一、序品）。

○花雨四種 『法華經』には、瑞相として曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華の四種の花が天から降り注いだことが繰り返しかえし述べられている。「是時天雨<sup>二</sup>曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華<sup>一</sup>、而散<sup>二</sup>仏上、及諸大衆<sup>一</sup>、普仏世界、六種震動」（『法華經』卷第一、序品）。154頁「四種花雨」語注参照。

○弥勒欲決疑、文殊能弁瑞 『法華經』序品に、弥勒菩薩が

神変の理由を文殊菩薩にたずね、文殊菩薩は、過去の諸仏の事例に照らすとこの放光は仏が大法を説く前の瑞兆であると答えた。「爾時弥勒菩薩、欲<sub>レ</sub>自決<sub>レ</sub>疑。亦觀<sub>レ</sub>四衆、

比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及諸天龍鬼神等、衆会之心<sub>一</sub>、而問<sub>レ</sub>文殊師利<sub>一</sub>言、以<sub>レ</sub>何因緣<sub>一</sub>、而有<sub>レ</sub>此瑞、神通之相<sub>一</sub>、放<sub>レ</sub>大光明<sub>一</sub>。(中略) 爾時文殊師利、語<sub>レ</sub>弥勒菩薩摩訶薩、及諸大士<sub>一</sub>、善男子等、如<sub>レ</sub>我惟付<sub>一</sub>、今仏世尊、欲説<sub>レ</sub>大法<sub>一</sub> (中略) 我於<sub>レ</sub>過去諸仏<sub>一</sub>、曾<sub>レ</sub>見此瑞<sub>一</sub>、放<sub>レ</sub>斯光<sub>一</sub>已、即<sub>レ</sub>説大法<sub>一</sub>。『法華經』卷第一、序品。

○醍醐味灑、豈求雪山之中 醍醐は牛乳を精製して得られる五味のうち最高の味。雪山(ヒマラヤ)の草を食べた牛の乳から醍醐が得られるとされる。「雪山有<sub>レ</sub>草。名曰<sub>レ</sub>肥膩<sub>一</sub>。牛若食者。純得<sub>レ</sub>醍醐<sub>一</sub>」(『涅槃經』卷第八、如来性品第五)。「又云。雪山有<sub>レ</sub>草。名曰<sub>レ</sub>忍辱<sub>一</sub>。牛若食者即得<sub>レ</sub>醍醐<sub>一</sub>」(『摩訶止観』卷第一上)。

○梅檀風 『法華經』卷第七、葉王菩薩本事品に、仏の法華經説法の後、一切衆生喜見菩薩が華と梅檀の抹香を雲のように虚空に満たし、また、海此岸の梅檀香の雨を降らせたとある。梅檀は閻浮提洲の南岸(海此岸)に産するとされる。「於<sub>レ</sub>虚空<sub>一</sub>中<sub>一</sub>、雨<sub>レ</sub>曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、細抹

黒梅檀<sub>一</sub>、満<sub>レ</sub>虚空<sub>一</sub>中<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>雲而下、又雨<sub>レ</sub>海此岸、梅檀之香<sub>一</sub>、此香六鉢、值<sub>レ</sub>直娑婆世界<sub>一</sub>、以供<sub>レ</sub>養仏<sub>一</sub>」(『法華經』卷第七、葉王菩薩本事品)。

○無<sub>二</sub>無<sub>三</sub>之車 大乘仏教の一乗の思想のこと。『法華經』では、三乗(声聞・縁覚・菩薩)は方便であり、仏の唯一の教え(一乗)に導く手段に過ぎないことを強調している。「十方仏土中 唯有<sub>レ</sub>一乘法<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>二無<sub>三</sub>、除<sub>レ</sub>三仏方便説<sub>一</sub>」(卷第一、方便品)。譬喩品(卷第二)には三乗が一乗に導くための手段であることを、長者が火事の家で知らずに遊ぶ子供たちを三車(羊車・鹿車・牛車)を与えるという外に連れ出した後に、三車よりも素晴らしい大白牛車を与えたことに喩えている。第二段落(17行)に「白牛之引導因」。

○難解難入之門 仏の智慧が深遠で理解しがたいことを、鏡を閉ざした門に喩えている。「爾時世尊。從<sub>レ</sub>三昧<sub>一</sub>安詳而起、告<sub>レ</sub>舍利弗<sub>一</sub>、諸仏智慧、甚深無量、其智慧門、難<sub>レ</sub>解難<sub>レ</sub>入、一切声聞。辟支仏。所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>知<sub>一</sub>」(『法華經』卷第一、方便品)。

○宝珠 『法華經』の無価宝珠の比喩。如来の智慧を授けられてもそれを知らずに小さな智慧で満足して過<sub>レ</sub>ごしている

ことを、酒によって寝ているうちに衣の裏に無価の宝珠を縫い付けられるがそれを知らずに貧しく過ごしてしまふことに喩えている。「世尊、譬如有<sub>レ</sub>人、至<sub>二</sub>親友家<sub>一</sub>。酔<sub>レ</sub>酒而臥<sub>上</sub>。是時親友、官事当行、以<sub>二</sub>無価宝珠<sub>一</sub>、繫<sub>二</sub>其衣裏<sub>一</sub>、与<sub>レ</sub>之而去」(『法華經』卷第四、五百弟子授記品)。

○照燃灯於暗中 『法華經』の功德を喩えている。「宿王華、此經能救<sub>二</sub>、一切衆生<sub>一</sub>者(中略)如<sub>二</sub>病得<sub>レ</sub>医、如<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>暗灯<sub>一</sub>」(『法華經』卷第七、藥王菩薩本事品)。

○他方 他方国土、他方淨土。現在の世界以外の世界。「陀方」とする本(古・板・校・柿)もあるが、仏典に「陀方」の用例は見出せないため「他方」が適切と思われる。

『無量壽經』の阿弥陀仏の四十八誓願のうち、四十一・五・四十六・八誓願は「他方国土諸菩薩」に対する誓願であり、「他方」は珍しい語ではない。「設我得<sub>レ</sub>仏、他方国土諸菩薩衆、聞<sub>二</sub>我名字<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>于得<sub>レ</sub>仏、諸根闕陋、不<sub>二</sub>具足<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>正覺<sub>一</sub>」(第四十一願)。

○四八相 三十二相。仏と転輪聖王に備わるといふ優れた三十二の特徴。身金色相・眉間白毫相など。

## 第二段

### 【現代語訳】

そもそも人の命は朝露のように消えやすく、春の夢のようにかない。栄華はすぐに枯木に变じ、歓楽はすぐに苦縁となる。だからいうまでもなく、桃花の紅の色はまだ浅いけれども、風に散るさだめを思つて道心を動かすべきである。柳の翠の色はまだ濃くないけれども、霜に散つた後の後悔を残さないようにと願う。自分は有り難くも後宮に身を置いて皇后の位を授けられたとはいえ、俗塵の身であるため、成仏の道に妨げがあることを恐れる。加えて、三界六道に流転する衆生もまたその罪を滅ぼし、悟りを得ることを願う。いったいどのような方法によつて救われるだろうか。ただ仏の照見をたのむだけである。何の善行によつて悟りに達することが出来るだろうか。法華一乗の引導を仰ぎ奉るのみである。

### 【語釈】

○風前 古い先の短さ、人生のはかなさを喩える。「既興風前嘆、重命花下酌」(『白氏文集』卷第五十一、「落花」)。

○月宮 後宮。「月宮」は通常中国の故事の姮娥が住む月宮

をさすが、ここでは仏典に見える月天子の住む宮殿（『起世経』卷第十）もふまえた表現と思われる。「月宮」と

「塵」の対比的表現は「属<sup>二</sup>姮娥<sup>一</sup>乞<sup>二</sup>而<sup>一</sup>乘<sup>二</sup>、月宮非<sup>二</sup>塵歩之所通<sup>一</sup>」、據<sup>二</sup>王母<sup>一</sup>以問<sup>レ</sup>方、仙窟豈<sup>レ</sup>戸行之得<sup>レ</sup>到<sup>一</sup>（『菅家文章』卷第十一、「為温明殿女御奉賀尚侍殿下六十算修功德願文」）の先例がある（山田尚子『重層と関連 続中国故事 受容論考』第四章参照）。

○承天 天子の妻、后をいう。『易经』に、「坤」（地、臣・妻）の徳は従順にして「乾」（天、天子）の徳を受け入れることであると説かれる。彖伝「至哉坤元、万物資生、乃順承天」（『易经』「坤」）。

○三有 衆生の住む三界（欲界・色界・無色界）。

○六趣 衆生が輪廻する六つの世界（天・人・阿修羅・餓鬼・畜生・地獄）。六道。

○覚蕊 「罪根」に対して、覚りを蕊（花のしべ）に譬えている。「臨時仁王会祝願文」（『本朝文粹』卷第十三、大江朝綱）に「併開<sup>二</sup>善根<sup>一</sup>、同攀<sup>二</sup>覚蕊<sup>一</sup>」とある。

○白牛之引導 『法華経』譬喩品（卷第二）に、法華一乘を大白牛車に譬えている。141頁「無<sup>二</sup>無<sup>一</sup>三之車」語注参照。

### 第三段

#### 【現代語訳】

そのために私はこれまで、あるときは比叡山において、あるときは法性寺において、多くの仏像を造り、しばしば経文を写し、長年、丹心（まごころ）を込めて白業（善い行業）を積んできた。しかし、仏が衆生に光明を放たれても、なおその光を見ない者がいる。仏が法華経を説法されても、席を立つうぬぼれた者たちがいる。そのために重ねて、仏法興隆、自他利益のために、金色の釈迦如来像一体を造立し奉り、金字の妙法蓮華経一部を書写し奉る。千花がすべて咲きそろう、百鳥が和して鳴くこの季節に、四日八講の会を開く。僧たちが智慧第一の舍利弗のような声を暮春の風にひびかせ、西域の才ある鶴勒那のように教義を皇太后にお聞かせする。その修する場所は、朱雀院の中、柏梁殿の上である。しかし花は優曇華のように美しく咲き、香は梅檀香のように薫りたつ。

#### 【語釈】

○天台山 天台宗の本山、比叡山のこと。大皇太后は承平五年（九三五）二月二十九日に『大般若経』の供養をしてい

る。「皇太后宮、於天台山、供養大般若經」（『日本紀略』）。

○法性寺 太皇太后は天慶五年三月十七日に法性寺で『涅槃經』、同八年二月二十七日に多宝塔と一切經の供養をして  
いる（『日本紀略』）。

○伏不見之人 『大智度論』に、舍衛城には九億人がいたが、三億人が仏を見て、三億人がわずかに仏を見、三億人が仏を見ず聞くこともなかったとある。「舍衛城中九億家。三億家見<sub>レ</sub>佛。三億家耳聞有<sub>レ</sub>仏而眼不見。三億家不<sub>レ</sub>聞不見」（『大智度論』卷第九）。

○退亦佳之輩 「退亦佳（退くも亦、佳し）」は、『法華經』方便品で、自分は覺りを得ていると思いがつた五千人の者たちが説法の座を立った時の仏の言葉。身延山本に「退<sub>一</sub>亦<sub>一</sub>佳」と音合符が打たれ、「佳」に「ケイ」の音読みの振り仮名があり、音読みの指示がある。「舍利弗。如<sub>レ</sub>是増上慢人。退亦佳矣」（『法華經』卷第一、方便品）。

○鶯子 舍利弗。目連と並ぶ仏弟子。舍利弗は智慧第一、目連は神通第一とされる。身延山本に左傍に小字で「舍利弗也」の書き入れがある。

○鶴勒 鶴勒那、または鶴勒夜那。月氏国の人。付法二十二祖とされる。鶴勒那が王無畏海に説法をしているときに緋

と白の衣を着た二人が現れて礼拝した。しばらくして消えてしまったので、王が誰であったかと尋ねると、鶴勒那は日と月の天子だと答えた。「勒那行至<sub>二</sub>中印度<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>王無畏海<sub>一</sub>。請<sub>二</sub>鶴勒那說法<sub>一</sub>。忽見<sub>二</sub>緋衣素服二人<sub>一</sub>。俱至礼拝。良久復没。王問何人。師曰。日月天子也」（『仏祖統紀』卷第五）。身延山本に左傍に小字で「弥勒也」の書き入れがある。

○長秋 皇后の住む宮。「有司奏立<sub>二</sub>長秋宮<sub>一</sub>」（李賢注）皇后所居宮也。長者久也、秋者万物成熟之初也、故以名焉（『後漢書』陰后紀）。

○優曇華 三千年に一度、または仏が現れる時に開くとされる花。

○海岸香 閻浮提洲の南の海岸は梅檀の産地とされる。141頁「梅檀風」語注参照。

#### 第四段

#### 【現代語訳】

ああ、釈迦牟尼仏が母摩耶夫人に説法をしたという切利天の宮殿の園には歓喜の名があり、極楽世界の鳥は妙法をさえ

ずるといふ。古を思いながら今のこの法会を感じてみると、  
 処は異にするが、趣は同じくしている。この法会の有難い利  
 益をすべての者にあまねく回向しようと願う。天神地祇が威  
 光を増して随喜し、冤罪で死んだ靈や邪鬼が恨みを消して仏  
 の道に帰することができましように。今上陛下（村上天皇）  
 の聖化は常に天下を照らし、太政天皇（朱雀天皇）の玉体は  
 永く明らかでありますように。諸王は磐石のかためを改めず、  
 賢相諸臣は天子の補佐につとめ、文武百官は共に力を合わせ  
 て忠節に励み、国中の民が皆歡樂の報を受け、そして有頂天  
 から阿鼻地獄に及ぶ一切の衆生が、法華經に説かれているよ  
 うに、一人残らず濟度されますようにと願う。敬白。

天慶十年三月十七日

【語釈】

○切利天宮 切利天（三十三天）にある園は歡喜と名づけら  
 れている。「諸比丘。又何因緣。彼天有園。名爲歡喜」。

三十三天王。入其中已。坐於歡喜善歡喜二石之上。

心受歡喜（『法苑珠林』卷第三、二界篇）。

○蓮華世界 極樂淨土。極樂の鳥たちは妙法を説くという。

「此想成時。行者當聞。水流光明及諸宝樹鳧雁鴛鴦。皆

説妙法」（『觀無量壽經』第八觀）。

○以此勝利、遍擬廻施 大江惟時「村上天皇供養雲林院御塔  
 願文」に類句「総会勝利、普將廻施」（『本朝文粹』  
 卷第十三、応和三年（九六三））がある。

○金輪 村上天皇を転輪聖王（金輪・銀輪・銅輪・鉄輪の四  
 王）のうち、金の輪宝を感得し、全世界を統治する金輪王  
 になぞらえている。前中書王（兼明親王）の「天皇御筆法  
 華經供養講説日問者表白」においても村上天皇を金輪王に  
 たとえている。131頁「金輪」「聖主」語注参照。「金輪聖主、  
 堯雲遍燾。潤葉草於春畝」（『本朝文粹』第十三卷、天曆九  
 年、九五五）。

○玄圃 崑崙山上にあるという仙人の住居。「崑崙之山三級、  
 下曰焚桐、一名板桐、二曰玄圃」（『水經』河水  
 注）。

○空桑 殷の賢相・伊尹が空桑から生まれたという故事から、  
 賢相をいう。「有佚氏女子採桑。得嬰兒於空桑」（  
 『呂氏春秋』卷第十四、本味）。

○金鉉 鼎などに付ける黄金のつり輪。「易經」では金鉉を  
 剛健の才ある天子の補佐役に喩えている。「鼎黃耳、金鉉。  
 利貞」（『易經』鼎）。

○横草 草を踏み倒すほどのわずかな功績。「軍無<sup>二</sup>横草之功<sup>一</sup>」師古曰言行<sup>二</sup>草中<sup>一</sup>使草偃臥、故云<sup>二</sup>横草<sup>一</sup>也、得<sup>二</sup>列<sup>レ</sup>宿衛<sup>一</sup>、食<sup>レ</sup>禄五年」(『漢書卷第六十四下、終軍伝)。

○乃至自有頂天、及阿鼻地 世界の最上部である有頂天から最下部の阿鼻地獄に至るまで。「眉間光明 照<sup>二</sup>于東方万八千土<sup>一</sup> 皆如<sup>二</sup>金色<sup>一</sup> 從<sup>二</sup>阿鼻獄<sup>一</sup> 上至<sup>二</sup>有頂<sup>一</sup> 諸世界中 六道衆生」(『法華経』卷第一、序品)。

(小林 真由美)

### 三、為仁康上人修五時講願文(410)

【身延山本翻刻】

- 0 為仁康上人修五時講願文 江匡衡  
 1 仏子仁康敬白  
 2 奉造立金色丈六釈迦牟尼仏像一軀  
 3 奉書写華嚴経等云々  
 4 右仏経奉造写如件夫仏日之出世也  
 5 先照高山次及幽谷影臨万水光満三  
 6 空円融亭午寂滅平西衆生破暗此  
 7 焉明矣不然者十方仏土所擯棄是娑  
 8 婆世界衆生徒累火血刀之業因焉聞  
 9 仏法僧之名字哉誠是生死海中大船師  
 10 煩惱病中大医王也仏子哀哉不值在  
 11 世之日不生正法之時省躬弥慙向誰而  
 12 訴経曰若聞釈迦牟尼如来名号雖未  
 13 発心已是菩薩矣是以感涙暗催心作  
 14 此念願我与善知識共奉造釈迦尊之  
 15 形像演暢所説之経典令衆生得見仏

- 16 聞法之便一二年來能事畢矣昔切利  
 17 天之安居九十日刻赤梅檀而模尊容今跋  
 18 提河之滅度二千年瑩紫磨金而礼両  
 19 足彼大王之力也五尺猶假天工此貧道  
 20 之功也丈六適叶人望方今於洛陽城河  
 21 原院設六日之大会移五時之旧儀身  
 22 子説経頭面礼仏七匝香煙琉璃之雲成  
 23 蓋四種花雨簷蔔之露添灯異口同音  
 24 讚嘆如來之相好低頭拱手懺悔過去之  
 25 罪業時也大衆中或垂涕曰我等不図今  
 26 日奉見靈山釈迦衆心歡喜得未曾有  
 27 嗟呼衆生慈父今已在此三界何子不  
 28 蒙教化仰仏昔於過去釈迦牟尼仏所  
 29 発心作願曰願我成仏時名曰釈迦牟尼  
 30 徒衆及教法如今日世尊仏子今願亦復  
 31 如是凡厥発因起縁或順或逆皆以今日  
 32 之善根將為來世之張本願共諸衆生  
 33 往生安樂国南無釈迦牟尼仏敬白  
 34 年 月 日

【翻刻注】

17 挿入符により「檀」字を挿入。

【校異】

東京国立博物館梅沢記念館旧蔵本（梅）、猿投神社<sup>19</sup>本（猿<sup>19</sup>）、天野山金剛寺本（剛）、内閣文庫本（内）、内閣文庫異本（内イ）、寛永六年刊古活字版（古）、正保五年跋板本（板）、田中參校訂本（校）、田中參校訂本所引永享本（永）、柿村重松『本朝文粹註釈』（柿）、『本朝文粹の研究』校本篇所引大河内本（河）

0 為仁康上人修五時講願文 江匡衡―（梅）ナシ

為―（河）ナシ

修―（猿<sup>19</sup>・河）「修河原院」

江匡衡―（剛）ナシ

2 立―（梅・猿<sup>19</sup>・永・河）「写」

軀―（剛）「軀」右傍に「イ軀」

3 奉書写―（梅）ナシ「華」ノ上ニ挿入符アリ、ソノ右傍

ニ剥脱痕アリ、（河）ナシ

華―（猿<sup>19</sup>）「花」

- 云々(梅・河)ナシ  
 4 件(剛)「右」右傍に「件」  
 5 先(剛)「光」  
 7 土(猿<sup>19</sup>・河)ナシ  
 9 海(梅)「海」下ニ挿入符アリ、ソノ右傍ニ「之イ」ノ注記アリ  
 10 仏子(剛)ナシ  
 11 哀(剛)「悲」、(猿<sup>19</sup>)「善」  
 而(猿<sup>19</sup>・内イ)「更」  
 12 如来(猿<sup>19</sup>)「仏」  
 号(猿<sup>19</sup>)ナシ  
 13 矣(河)「也」  
 感涙(剛)「仏子感涙」  
 15 之(猿<sup>19</sup>)ナシ  
 二千年(永)「二千年」  
 18 琉(梅・猿<sup>19</sup>・河)「瑠」  
 22 花(河)「華」  
 23 詹(梅・猿<sup>19</sup>・柿・河)「蒼」  
 26 衆(河)「衆生」  
 27 呼(梅)「乎」

- 28 仏(剛)ナシ  
 30 及(猿<sup>19</sup>)ナシ  
 33 釈(猿<sup>19</sup>)「尺」  
 34 年月日(猿<sup>19</sup>・河)「正暦二年三月廿八日 仏子 敬白」

【校訂本文】(□内は校訂箇所)

為仁康上人修五時講願文 江匡衡

仏子仁康敬白

奉造立金色丈六釈迦牟尼仏像一軀

奉書写華嚴経等云々

右、仏経奉造写如件。夫仏日之出世也、先照高山、次及幽谷。影臨万水、光満三空。円融亭午、寂滅平西。衆生破暗、此焉明矣。不然者、十方仏土所擯棄、是娑婆世界衆生、徒累火血刀之業因。焉聞仏法僧之名字哉。誠是生死海中、大船師、煩惱病中大医王也。仏子哀哉。不值在世之日、不生正法之時。省躬弥慙、向誰更訴。経曰若聞釈迦牟尼如来名号、雖未発心、已是菩薩矣。是以感涙暗催、心作此念。願我与善知識、共奉造釈迦尊之形像、演暢所説之經典、令衆生得見仏聞法之便。

一二年來、能事畢矣。(第一段)

昔切利天之安居九十日、刻赤梅檀而模尊容、今跋提河之滅度二千年、瑩紫磨金而礼両足。彼大王之力也、五尺猶仮天工。

此貧道之功也、丈六適叶人望。方今於洛陽城河原院、設六日之大会、移五時之旧儀、身子説経、頭面礼仏。七匣香煙、琉璃之雲成蓋、四種花雨、匱葡萄之露添灯。異口同音、讚嘆如來之相好、低頭拳手、懺悔過去之罪業。時也大衆中、或垂涕曰、我等不図、今日奉見靈山釈迦。衆心歛喜、得未曾有。(第二段)

嗟呼衆生慈父、今已在此。三界何子、不蒙教化。仰仏昔於過去釈迦牟尼所、発心作願曰、願我成仏時、名曰釈迦牟尼。徒衆及教法、如今日世尊。仏子今願亦復如是。凡厥発因起縁、或順或逆、皆以今日之善根、將為來世之張本。願共諸衆生、往生安樂國。南無釈迦牟尼仏。敬白。(第三段)

正暦二年三月廿八日 仏子 敬白

【訓読】

仁康上人の為に五時講を修する願文 江匡衡  
 仏子仁康敬ひて白す。

造立し奉る金色丈六釈迦牟尼仏像一軀。

書写し奉る華嚴経等云々。

右、仏経造写し奉ること件の如し。夫れ仏日の世に出づる、先づ高山を照らし、次に幽谷に及ぶ。影万水に臨み、光三空に満つ。円融午に亭り、寂滅西に平らかなり。衆生暗を破して此れ焉に明らかなり。然らずんば、十方仏土に擯け棄てられたる、是の娑婆世界の衆生、徒らに火血刀の業因を累ぬ。焉ぞ仏法僧の名字を聞かんや。誠に是れ生死海の中の大船師、煩惱病の中の大医王なり。仏子哀しいかな。在世の日に値はず、正法の時に生まれざることを。躬を省て慙づ、誰に向かひてか更に訴へん。経に曰く、若し釈迦牟尼如來の名号を聞かば、未だ発心せずと雖も、已に是れ菩薩といへり。是れを以て感涙暗に催し、心に此の念を作す。願はくは我れ善知識と、共に釈迦尊の形像を造り奉り、所説の經典を演暢して、衆生をして見仏聞法の便りを得しめんと。一二年來、能事畢ぬ。(第一段)

昔切利天の安居九十日、赤梅檀を刻んで尊容を模す、今跋提河の滅度二千年、紫磨金を瑩いて両足を礼す。彼れ大王の力なり、五尺猶は天工を仮る、此れ貧道が功なり、丈六適ま人望に叶ふ。方に今、洛陽城河原院にして、六日の大会を設け、五時の旧儀を移す、身子経を説きて、頭面に仏を礼せしかば、七匣香煙、琉璃の雲蓋を成し、四種花雨、蘆葡萄の

露灯ともしびに添ふ。異口同音、如来の相好を讚嘆して、低頭挙手して、過去の罪業を懺悔しき。時に大衆なかの中に、或ひと涕を垂れて曰はく、我等図らず、今日靈山の釈迦を見奉らんといふことを。衆心歡喜し、未曾有なることを得き。(第二段)

嗟呼、衆生の慈父、今已に此に在ます。三界何れの子か、教化を蒙らざらん。仰も仏、昔過去むかしの釈迦牟尼仏の所みもとにして、心を発おこして願を作なして曰はく、願はくは我れ成仏の時、名を釈迦牟尼と曰はん。徒衆及び教法、今日の世尊の如くならんと。仏子が今の願ひ、亦た復た是くの如し。凡そ厥れ発因起縁、或ひは順或ひは逆、皆な今日の善根を以て、將に來世の張本とせん。願はくは諸の衆生と共に、安樂国に往生せん。南無釈迦牟尼仏。敬ひて白す。(第三段)

正暦二年三月廿八日 仏子 敬白

### 【解説】

正暦二年(九九一)三月、仁康が康尚に造らせて河原院に安置した釈迦仏のため、仁康自身が五時講を修するための願文。五時講では、天台宗智顛の五時教判(經典を釈迦一代のうちうちの五つの時期に分類して体系化する)に従い、五部大乘經の『華嚴經』『大集經』『大品般若經』『法華經』『涅槃經』

の五つが順次講説される。仁康は、源融の子で、祇陀林寺の本主という(『帝王編年記』正暦二年三月十八日条)。また、慈恵大師良源の弟子ともいう(『今昔物語集』卷十七、僧仁康祈念地藏通疫癘難語第十)。天台宗の僧侶。『続古事談』卷四には、当該願文の製作をめぐる以下のように記される。「河原院は、融左大臣の家也。台閣水石、風流をつくして、つくりみがきてすみ給ひけり。うせ給ひて後、其御子、宇多法皇にたてまつりて、時々わたり給ひけり。かの大いの靈、とゞまりすむきこえ有ければにや、つねにはすみ給はず。大臣の拔苦の為に、誦經せられたる事あり。其後、仏閣になりにけり。仁康上人と云ふもの、知識をすゝめて、丈六の釈迦仏をつくりて、この所にすゑたてまつりけり。大安寺の釈迦仏は、天人のつくりたるなり。それをうつして、仏師康尚、此仏をつくれり。維敏、満仲などいふ武者より始めて、結縁助成せり。仮堂を作りて、始めて五時講を行ふ。時の明匠、日ごとに請におもむく。所謂山の座主花山嚴久僧都、横川明豪僧正、東塔静仲供奉、静昭法橋、清範律師也。説經論義ことばを尽くして、おきろをきはむ。願文は、大江匡衡つくりて、佐理宰相、清書せられたり(以下略)」。この五時講について、『帝王編年記』では正暦二年三月十

八日条に見えるが、当該願文には正暦二年三月二十八日の年記がある。ただし、この年記は身延本にはなく、校合に用いた猿投神社蔵本による。

この願文のうち、第二段の「昔切利天之安居九十日、刻赤梅檀而模尊容、今跋提河之滅度二千年、瑩紫磨金而礼両足」の句は秀句として『和漢朗詠集』（巻下・仏事）に収載されている。この句の上句は、『語釈』（第二段）で説明するように、釈迦が母摩耶夫人への説法を行うため、三十三天（切利天）に行つてしまつた後、釈迦の姿が見えなくなつたことを嘆いた優填王が、牛頭梅檀の香木で生身の釈迦像を造らせたという伝承を踏まえる。この伝承は、『増一阿含経』聴法品第二十八などに見え、当時すでによく知られたものであつたと考えられるが、注意を払つておかねばならないのは、当該願文の製作された正暦二年の四年前に当たる永延元年（九八七）、東大寺僧齋然が、優填王造立の生身の釈迦像と伝えられるものの模像を携え、中国から帰国したという点である（塚本善隆「清凉寺釈迦像封蔵の東大寺僧齋然の手印立誓書『塚本善隆著作集』七」。このとき、釈迦像のほか、齋然とともに入宋した弟子の盛算が書写した「優填王所造梅檀釈迦瑞像歴史」（十明述、十世紀成立）も将来されている。こ

の『瑞像歴史』は、優填王の釈迦像造立の顛末のほか、この釈迦像が天竺から震旦へと運ばれた経緯など、当該釈迦像をめぐる記述を諸々の文献に博搜してそれを集成したもので（平林盛得「資料紹介」優填王所造梅檀釈迦瑞像歴史―附西郊清凉寺瑞像流記―『書陵部紀要』二十五）、『三宝感応要略録』の粉本となつたほか、後述のように、清凉寺釈迦像をめぐる伝承の根本資料ともなつた（荒木浩「今昔物語集」に於ける『三宝感応要略録』続貂）後藤昭雄監修『金剛寺本『三宝感応要略録』の研究』など）。当該願文の製作に際して、匡衡が『瑞像歴史』を目にした可能性も視野に入れる必要があろう。

一方、齋然将来の釈迦像は、齋然の没後、愛宕山棲霞寺内の釈迦堂に安置され、そこを五台山清凉寺と号する勅許を受け、やがて多くの人々に尊崇されることとなつた。『和漢朗詠集』の注釈書では、「昔切利天之安居九十日、刻赤梅檀而模尊容云々」の摘句の注釈に、清凉寺の本尊である齋然将来の釈迦像の由来譚として、『瑞像歴史』を起源とする優填王の釈迦像をめぐる言説が記述されるようになる。やがてそうした言説が『宝物集』や『保元物語』などの軍記物語の説話へ、あるいは『転宝輪鈔』などに見える唱導の言説へと拡大

し、さらに『清凉寺縁起』へと結実するものと考えられる（宮田寿栄「説話の流伝―清凉寺釈迦像縁起譚をめぐって―」『仏教文学』十など）。また、『江談抄』においては、「昔切利天之安居九十日云々」の句について「仁康上人入唐之時、為母於六波羅蜜寺供養仏経之願文也」などと説明するが、これは『本朝文粹』において、当該願文の次に齋然を願主として作られた慶滋保胤「齋然上人入唐時為母修善願文Ⅱ」が掲載されているためだと推定されている（中川真弓「朗詠注と太子伝における「仏法最初の釈迦像」譚」『待兼山論叢（文学篇）』三十七）。

釈迦像将来をめぐっては、その背景に東大寺僧齋然の山門に対する対抗意識があったことが指摘されており（前掲、塚本論文）、逆に、仁康による釈迦像造立ひいては匡衡製作の当該願文に、齋然に対する山門の対抗意識を窺う見方もある（奥健夫「清凉寺釈迦如来像の受容について」『鹿島美術研究』年報十三別冊など）。当該願文には、釈迦牟尼の名号への言及が頻繁に見え、釈迦および釈迦信仰に対する強い意識が窺われることから、少なくとも当該願文が齋然将来の釈迦像をかなり意識した上で作られたものと考えられることはできるだろう。

## 第一段

### 【現代語訳】

右のとおり、仏像を造り、経文を写し申し上げる。そもそも、日が昇るとまず高山を照らし、次に幽谷に及ぶ。その影はすべての河川に映り、その光が空いっぱい満ちる。正午には空の最も高いところで円融の状態を体現し、西に沈むときには寂滅の状態を体現する。こうした日の有り様と同様に、仏が世に現れたときもまた、その知恵の光明は、まず菩薩や縁覚、声聞を照らした後、一切の衆生を照らし、やがて衆生を寂滅の状態に導くであろう。衆生は無明の闇を破り、ここに至って明らかな仏の知恵を得ることができるのである。そうでなければ、十方仏土に排斥されたこの娑婆世界の衆生は、ただ悪業を重ねるばかり。どうして仏法僧の名号を聞こうか。まことに仏とは、生死流転の、まるで海のごときこの世界を脱するための偉大な船頭であり、煩惱という病を治すための偉大な名医である。哀しいかな。私仁康が、仏の在世のときにも、正法の時代にも生まれることができなかったことは。自分の身を省みてはすかしく思う、この上誰に向かって訴えればよいのか。経によれば、釈迦牟尼如来の名号を聞いた者は、まだ発心していなくても、すでに菩薩なのだ、という。

この文言に感じて涙が自然と流れ、心中には以下のような思いが生じた。願うのは、私が僧侶たちとともに釈迦の像を造り申し上げ、釈迦が説く經典を講演して、衆生に仏を見て法を聞く手立てを得てほしいということだ。それ以来一年から二年がたち、この造仏と写経とを成し遂げた。

### 【語釈】

○仏子 仏弟子。ここでは、仁康上人自身のこと。

○仏日・高山・幽谷 「仏日」は、仏や、仏の教えを日（太陽）に喩えた語。八十卷本『華嚴經』巻第五十、如来出現

品第三十七之一には、「譬如<sup>二</sup>日月、随<sup>レ</sup>時出現、大山幽谷、普照無<sup>レ</sup>私。如来智慧、復亦如<sup>レ</sup>此、普照<sup>二</sup>一切<sup>一</sup>、無<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>分別<sup>一</sup>、随<sup>レ</sup>諸衆生根欲不同<sup>一</sup>、智慧光明、種々有<sup>レ</sup>異」と見える。これは、まず山を、次に高原を、次に大地を、というように日月が照らす順序には先後があるけれども、こうした先後は日月の意図ではなく、ただ山地に高下があることによるものであって、これと同様に、如来の知恵の光明も、まず菩薩を、次に縁覚を、次に声聞を、次に決定善根の衆生を、次に一切の衆生をという順に照らすけれども、こうした先後は如来の意図ではなく、一切衆生を照ら

そうとすることのみが目的であることを述べたもの。六十卷本『華嚴經』では、巻第三十四、宝王如来性起品第三十二之二に該当箇所があり、そこには「譬如<sup>下</sup>日月、出<sup>二</sup>世間<sup>一</sup>、乃至<sup>二</sup>深山幽谷<sup>一</sup>、無<sup>レ</sup>不<sup>二</sup>普照<sup>一</sup>」とある。

○三空 仏教において「空」とは、存在するものに「自体」や「実体」といったものはないとする考え方だが、ここでは、この語を取って「大空」、すなわち、頭上に広がる大空の意に用いている。『性靈集』巻七「僧寿勢為<sup>二</sup>先師<sup>一</sup>入<sup>二</sup>忌日料物<sup>一</sup>願文57」に「三空蕩<sup>二</sup>三有之雲<sup>一</sup>、一実灑<sup>二</sup>一心之雨<sup>一</sup>」とある。

○円融 それぞれの立場を保ちつつ完全に融け合つて一体となり、相互にさまたげのないこと。ここでは太陽がそのような状態にあることをいう。

○亭午 「午」は日中の意。「亭午」は正午に日が空高く昇つた状態をいう。『文選』巻十一「遊天台山賦」（孫綽）に「羲和亭<sup>レ</sup>午、遊気高褰」とある。

○寂滅 迷いの世界を離脱している境界。

○平西 日が西に沈んでいくさまを表す。『白氏文集』巻十六「北楼送<sup>二</sup>客帰<sup>一</sup>上都<sup>二</sup>0922」に「京路人帰天直<sup>レ</sup>北、江楼客散日平<sup>レ</sup>西」とあるのを踏まえる。

○破闇 「破闇」に同じ。仏の本願を固く信じて疑わな心が無明の闇を破ることをいう。八十卷本『華嚴經』卷第五十、如来出現品第三十七之一に「譬如日出闇浮提、無量衆生、皆得饒益」。所謂、破闇作光明とある。また、大江朝綱「為中務卿親王家室 四十九日願文」(『本朝文粹』卷十四、423)に「非假大日遍照之光、何成黑夜破暗之計」とある。

○十方仏土 「十方浄土」とも。あらゆる場所に存在する無量の浄土。

○擯棄 排斥する。

○火血刀 火塗・血塗・刀塗の三塗をいい、順に地獄・畜生・餓鬼にあてはめられる。これらは迷いの衆生が墮ちる苦しみに満ちた三つの生存領域で、「三惡道」「三惡趣」とも呼ばれる。『法華驗記』卷上第二十三話に「此生不揚名譽 手空過、後世可歩火血刀路」とある。

○生死海 生死流転の迷いの境界を海に喩えた語。八十卷本『華嚴經』卷三、世主妙嚴品第一之三の偈頌に「一切衆生界、流転生死海」などとある。また、大江匡衡「為盲僧真救 供養卒塔婆 願文」(『本朝文粹』卷十三、405)に「涅槃山上、釈尊之日早藏、生死海中、慈氏之月未照」

とある。

○大船師 偉大な船頭。生死の海を渡る衆生を助ける。六十卷本『華嚴經』卷第五十六、入法界品第三十四之十三の善財菩薩の言に「若有菩薩如是行者、悉能莊嚴一切衆生」。(中略)為大船師、皆令得度生死海故」とある。

○大医王 偉大な名医。世の人々の煩惱の病をいやし、病に応じた教えの薬を与える。六十卷本『華嚴經』卷第三十四、宝王如来性起品第三十二之二に「譬如大医王、善知衆藥对治之法、一切方論皆悉明練。彼大医王、閻浮提中一切藥草、若現其前、悉能識別。彼大医王、宿善根力。又能明了諸方論故、悉能療治一切衆病」。(中略)如来応供等正覚無上医王、亦復如是。善能明了諸对治法、悉能除滅一切衆生諸煩惱病」とある。

○正法之時 仏滅後の時代を正法・像法・末法のの三つに分けた場合の最初の時代。仏の教えがよく保たれ、正しい修行によつて悟りが得られる時代。

○経曰若聞釈迦牟尼如来名号、雖未発心、已是菩薩矣 『央掘魔羅經』卷第四に「若聞釈迦牟尼如来名号、雖未発心、已是菩薩」とある。

○作此念 これ以下の事柄を考えたという意で、仏典での常套句。例えば、『法華経』巻第一、序品第一には「爾時弥勒菩薩、作<sub>レ</sub>是念<sub>一</sub>、今者世尊、現<sub>レ</sub>神变相<sub>一</sub>云々」とある。

○善知識 善業を行う人々。ここでの善業は仏像を造り、法会を行うこと。

○演暢 教えやその義理を述べること。仏典でよく用いる。

○見仏聞法之便 『法華経』巻第六、随喜功德品第十八に「世々所<sub>レ</sub>生、見<sub>レ</sub>仏聞<sub>レ</sub>法、信<sub>レ</sub>受教誨<sub>一</sub>」とある。大江匡衡「為<sub>レ</sub>左大臣<sub>一</sub>供<sub>レ</sub>養浄妙寺<sub>一</sub>願文」には、「黒白衣之雲集、豈唯三州五郡浅契、内外戚之影従、抑亦見仏聞法之大縁」とある。

○能事畢矣 完結する意。『周易』繫辞上伝に「八卦而小成、引而伸<sub>レ</sub>之、触<sub>レ</sub>類而長<sub>レ</sub>之、天下之能事畢矣」とある。

## 第二段

### 【現代語訳】

昔、釈迦が初利天で九十日間の説法を行った時、優填王は赤梅檀を刻して釈迦像を作った。今、釈迦が跋提河の西岸で入滅してから二千年がたち、金の釈迦像を作ってこれを持つ。あのとときの釈迦像は大王優填王の尽力で成ったもので、天匠

の手を借りて五尺の像が作られた。今この釈迦像は拙僧の善行で成ったもので、たまたま人々の望みにかない、一丈六尺の像が作られた。今まさに、東京の河原院にて六日間の法会を開催し、かつての釈迦の五時の教説にならって法会を行う。仏弟子であるこの仁康が頭を下げて礼拝して経を唱えれば、七層に囲む香煙が瑠璃の雲のような蓋いとなり、四花が天から降って薔薇の露にもし火が映ったようである。会衆の人々は口々に釈迦像の相好を讃嘆し、低頭挙手して過去の罪深き悪業を懺悔する。そのとき、会衆の中のある人が、涙を流しながら「私たちは意図せずして、本日、靈鷲山の釈迦如来を拝見した」と言った。会衆は皆な歡喜し、未曾有（未だかつて無い素晴らしい経験）を得たのだ。

### 【語釈】

○初利天之安居九十日、刻赤梅檀而模尊容 『增一阿含経』巻第二十八、聴法品第二十八などによれば、釈迦が母摩耶夫人への説法を行うため、三十三天（初利天）に行つてしまった後、波斯匿王、優填王の二王は、釈迦の姿が見えなくなったことを嘆き、優填王は牛頭梅檀で、波斯匿王は紫磨金（最高の黄金）で、釈迦像を造らせたという。「牛頭

梅檀」はインド山脈の牛頭地方の梅檀（香木）で、『和名類聚抄』草木部三十二、木類に「梅檀、唐韻云、梅檀香木也、内典云、赤者謂之牛頭梅檀」とある。また、『優填王所造梅檀釈迦瑞像歴史』に「仏遊天竺記云、仏成道後八年、思報<sup>レ</sup>母恩、遂昇<sup>レ</sup>初利天、為<sup>レ</sup>母說法、過<sup>レ</sup>夏<sup>九</sup>日」とある。「安居」は、「夏、九旬、夏講ともいい、夏から初秋にかけての三箇月間、僧侶が一箇所に籠もつて修行すること。」

○跋提河 古代インドの拘尸那揭羅國の川。釈迦がこの川の西岸で入寂した。

○五尺猶仮天工 優填王の五尺の釈迦像は、実は毘首羯磨が変身して匠となった、天匠の手に成るものであった。『優填王所造梅檀釈迦瑞像歴史』に「爾時、毘首羯磨、即變<sup>二</sup>其身<sup>一</sup>而為<sup>二</sup>匠者<sup>一</sup>、持<sup>二</sup>諸利器具<sup>一</sup>、白<sup>レ</sup>王言、我今欲<sup>下</sup>為<sup>二</sup>大王<sup>一</sup>造<sup>レ</sup>像。爾時王心大歡喜、与<sup>二</sup>主藏大臣<sup>一</sup>、於<sup>二</sup>内藏中<sup>一</sup>、選<sup>二</sup>択香水<sup>一</sup>、肩荷負持与<sup>二</sup>天匠<sup>一</sup>」とある。

○四種花雨 曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華の四華（四花）が、釈迦說法のときに空から降つたという。『法華經』卷一、序品第一に「仏説<sup>二</sup>此經<sup>一</sup>已、結跏趺坐、入<sup>二</sup>於無量義処<sup>一</sup>三昧、身心不<sup>レ</sup>動。是時天雨<sup>二</sup>曼陀

羅華、摩訶曼陀羅華、曼珠沙華、摩訶曼珠沙華、而散<sup>二</sup>仏上及諸大衆<sup>一</sup>」とある。138頁「花雨四種」語注参照。  
○蒼葡 西域の香りのよい名花という。普通、クチナシの花に当てる。

○異口同音 口をそろえて。仏典に類出する表現。

○相好 仏のからだの各部の身体的特徴の総称。

○低頭挙手 軽く敬礼すること。『法華經』卷一、序品第一の偈に「或有<sup>レ</sup>人礼拜、或復但合掌、乃至挙<sup>二</sup>一手<sup>一</sup>、或復小低<sup>レ</sup>頭、以<sup>レ</sup>此供<sup>二</sup>養像<sup>一</sup>、漸見<sup>二</sup>無量仏<sup>一</sup>」とある。

○靈山 靈鷲山。釈迦が『法華經』や『無量壽經』を説いた場所。

○得未曾有 『法華經』卷一、序品第一に「是諸大衆、得<sup>二</sup>未曾有<sup>一</sup>、歡喜合掌、一心觀<sup>レ</sup>仏」とある。

### 第三段

#### 【現代語訳】

ああ、衆生の慈悲深い父である釈迦牟尼仏が、今すでにここにいらつしやる。この世界のもので、その教化を被らないものがあるか。そもそも仏は昔、過去の釈迦牟尼仏のところへ発願して言うことには、「願わくは自分が成仏したときに

は釈迦牟尼と名乗ることにしたい。そして信徒や教法については、今日の世尊のようにしたい」と。私仁康の願いもまた同様である。おおよそ造仏や写経、法会などの功德は、人によつては順修となり、別の人にとつては逆修となるが、亡くなつたひとにとつても生きている人にとつても）すべて今日の善根であり、来世に成仏するための因縁なのである。願わくは、多くの衆生とともに極楽浄土に往生できますように。南無釈迦牟尼仏。つつしんで申し上げます。

### 【語釈】

○仰仏昔於過去釈迦牟尼仏所、発心作願曰、願我成仏時、名曰釈迦牟尼。今の釈迦がかつての釈迦のもとで釈迦のことくなることを発願したというのは、『大般涅槃經』卷第二十九、獅子吼菩薩品第十一之三に「善男子、我念往昔過無量劫。此城爾時名迦毘羅衛。其城有王名曰白淨。其王夫人名曰摩耶。王有二子一名悉達多。爾時王子不<sub>レ</sub>由<sub>二</sub>師教<sub>一</sub>、自然思惟得<sub>二</sub>阿耨多羅三藐三菩提<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>弟子<sub>一</sub>。一名舍利弗、二名大目犍連。給侍弟子名曰阿難。爾時世尊在<sub>二</sub>双樹間<sub>一</sub>演<sub>二</sub>說如<sub>レ</sub>是大涅槃經<sub>一</sub>。我時在<sub>レ</sub>會得<sub>レ</sub>預<sub>二</sub>斯事<sub>一</sub>、聞<sub>二</sub>諸衆生悉有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>、聞<sub>二</sub>是事<sub>一</sub>已

即於<sub>二</sub>菩提<sub>一</sub>得<sub>二</sub>不退転<sub>一</sub>、尋自發<sub>レ</sub>願、願未來世成仏之時、父母・国土・名字・弟子・侍使之人・說法教化、如<sub>二</sub>今世尊<sub>一</sub>等無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>異。以<sub>二</sub>是因縁<sub>一</sub>今來在<sub>レ</sub>此數<sub>二</sub>揚演<sub>三</sub>說大涅槃經<sub>一</sub>とある。

○張本 往生成仏のもとになるもの。白居易の「六讚偈序」(『白氏文集』卷七十、361)に「故作<sub>二</sub>六偈<sub>一</sub>、跪唱<sub>二</sub>於仏法僧前<sub>一</sub>、欲以起<sub>レ</sub>因縁<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>來世張本<sub>一</sub>也」とある。

(山田 尚子)

本稿は、成城大学特別研究助成共同研究「身延山本『本朝文粹』卷第十三の研究」の成果報告である。